



特定看護師から広がる医療

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院 特定看護師 月坂裕里加

国立国際医療研究センター病院は、東京都新宿区にある三次救急を受け入れる急性期総合病院です。私は、地域医療振興協会(以下、協会)外の病院からの初めての研修履修者です。当院では特定看護師と呼ばれています。急性期病院でへき地への支援とは離れたところにおりますが、現在の特定看護師としての活動をご紹介します。

入職して最初の所属は、一般病棟でした。3年を経験したころ急性期看護を勉強したいと思い、集中治療室を希望して、異動となりました。しかし意識レベルの低い患者が多い集中治療室で、自分のやっていることが果たして患者のためになっているのかと疑問を持つようになりました。そのような気持ちを抱きながらも「石の上にも3年」と思い、道が開けることを期待し、8年間ICU看護師として日々看護に向き合っていました。次第に、集中治療室の治療を多職種で進める面白さに気づきました。うち2年間は大阪の国立循環器研究センターのICUで心臓血管外科の楽しさを知りました。勉強すればするほど知らないことが増えていき、この先自身がどんな看護師になりたいか考えた時、もっと勉強したいと思う気持ちと、看護師のできる範囲の最大限を使って患者の状態をよくしたいという思いが強くなり特定看護師の道へ進みました。

現在は、当院で初めての全特定行為のできる看護師として、所属は看護部集中治療室ですが診療科とともに行動をしています。研修医を含

め医師の数が多い病院ですが、緊急手術が多く医師の数が少ない心臓血管外科と脳神経外科を約3ヵ月ごとにローテーションをしています。実際の業務は、朝のカンファレンス、回診、その日の検査結果や主治医の治療方針を確認しながら指導医とともに処置や処方を行います。

緊急手術があれば一緒に入りプレパレーションや助手、時には機械出しをします。術前術中術後の管理を一連の流れで把握するようにしています。術後管理をする上で、自身が把握している情報を病棟ナースや多職種と共有することで、タイムリーにケア介入できることが患者にとってメリットだと感じています。

今回、脳神経外科での活動を具体的に紹介したいと思います。

脳梗塞血栓回収後、SCU入院中の60歳の男性。既往に心不全や誤嚥性肺炎があり、なかなか抜管ができなかった患者でした。いつも患者を診に行っては心エコーを当ててボリューム調整をしたり、人工呼吸器を調整したりしました。しかし心不全や感染からARDS(急性呼吸窮迫症候群)となり人工呼吸器でのサポートではよくならず気管切開を検討せざるを得ませんでした。もっと患者の状態をよくできる方法はほかにないか考え腹臥位療法を実施しようと考えました。もちろん腹臥位は慣れていないと事故抜管や循環動態に影響を与えるリスクもあります。今回は同じユニットでも呼吸器管理に慣れていないSCUでしたが、病棟ナースへ腹臥位療法について説明し、一緒に挑戦してみることに



国立国際医療研究センター病院



手術室の様子

しました。腹臥位をしたあとから酸素化は著明によくなり、そこからできる限り毎日病棟ナースやPTとともに腹臥位を実施、2週間後に無事抜管することができました。脳卒中にて麻痺は残ってしまいましたが、徐々に安静度を拡大、リハビリを実施。最終的には無事リハビリ転院することができました。

これは医師だけでできることでもナースだけでできることでもありません。特定看護師という立場から医師へ腹臥位療法を提案、方針と擦り合わせてそれを病棟ナースやPTにも伝え協力したことによってチームとして出せた結果ではないかと感じます。

医師には医師にしかできないことがあります。看護師も同様に、患者と過ごす時間が一番多い職種だからこそ、気づけることやできることもあります。その患者にタイムリーに最良のケアをするために私たちは存在するのだと思います。

「[医学]だから看護師はできない」ではなく、特定行為研修を受け、研鑽する看護師は、臨床実践力を拡大することができると指導医の先生方から教えてもらいました。そこには症状ひと

つとつとも臨床推論があり、指導医へ自身のアセスメントをプレゼンし、医学的に正しいかどうかを確認しながら治療を進める楽しさがあります。また、看護師ならではの観察力や勘、ヒーリング力、行動力があるはずだと感じます。

医師や看護師、理学療法士、薬剤師、ソーシャルワーカーなどさまざまな医療者の集団があり、協力しあって治療が成り立つということを身にしみて感じます。その中で、看護師としての力を最大限に発揮し、より良い治療を提供できることが治療をスムーズに進めることにつながります。

高齢化社会、10年先には特定行為履修者が当たり前の世の中になっているかもしれません。私はへき地へ貢献するには力不足で、今は自分の置かれた場所で医療チームの一員として働けるように力を伸ばすこと、後輩への教育が大切だと感じます。

もちろん目標達成にはまだまだ遠いけれど、協会外から受け入れてくださったJADECORNDC研修センター、指導医、看護部、同期、同僚のおかげで毎日楽しく仕事できて幸せだと感じます。